



『親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息』をいただいて (二)

普賢晃壽 (ふげん こうじゅ)

ご消息をいただきますと、浄土真宗の「おみのり」を、

親鸞聖人によって開かれた浄土真宗は、あらゆる人びとが、阿弥陀如来の本願力によって、往生成仏し、この世に還^{かへ}って迷えるものを救うためにはたらくという教えです。南無阿弥陀仏の名号を聞信^{もんしん}するところに往生が定まり、報恩感謝^{ほうおんかんしゃ}の思いから、如来のお徳を讃える称名念仏の日々を過ごさせていただくのです。

と、浄土真宗の教えのかなめを明快にご教示されています。

浄土真宗は他力廻向の宗教ということが出来ます。この場合、他力廻向とは自力廻向の言葉に対します。

自力廻向とは、自分の力で積みあげた善根・功徳を衆生や自分のさとりのために、めぐらし(廻)ふりむける(向)という意味であります。仏果^{ぶつこ}を求めての自力の修行のいとなみであります。廻向の主体は修行者です。

これに対し、他力廻向とは、阿弥陀如来の本願他力による廻向という意味であります。すべての生きとし生けるものを願いのとおり、平等に救済されるはたらき、力用^{りきゆう}を本願力というのであります。

阿弥陀仏はその正覚^{しょうがく}の大智^{だいち}大悲^{だいひ}の果徳^{かとく}全体を名号におさめ、衆生におめぐみ下され、往生成仏せしめたもうのであります。このことを『一念多念証文^{いちねんたねんしょうもん}』には、

「回向」は本願の名号をもって十方の衆生にあたへたまふ御のりなり

(『註釈版聖典』〈第二版〉六七八頁)

と積されています。

『教文類』に浄土真宗のおみのり、阿弥陀仏の本願力廻向の救済活動に往相廻向と還相廻向の二種の相があることが教示されています。往相とは迷いの苦界をさまよう衆生が浄土に往生し、仏果を完成させていく往生成仏の相であり、還相とは浄土に往生しさとりを証^{しょう}し、迷いの世界に還り来たり、迷っているものを済度^{さいど}する悲用^{ひゆう}を用いるのであります。そしてこの往相も還相もすべて阿弥陀仏の本願力により、めぐまれることを往相廻向・還相廻向というのであります。

このような阿弥陀仏の救済活動、如来の本願力のはたらきが具体化された結晶が南無阿弥陀仏の名号であります。この仏廻向の名号の力用により、私たちは生ある限り往生浄土の大道^{だいたう}を歩み、命おわれればお浄土に往生し、仏果を証^{しょう}し、娑婆^{しゃば}に還り来たって、衆生済度の活動をさせていただくのであります。このことを『正像末和讃^{しょうざうまつわさん}』には、

南無阿弥陀仏の回向の

恩徳廣大不思議にて
往相回向の利益には
還相回向に回入せり

(『同』〈第二版〉六〇九頁)

と讃げられています。



このような如来大悲のおめぐみである名号の真実を心に頂き、称名念仏するものを必ず救うと誓われるのが第十八願であります。名号は我に帰せよ、必ず救うという如来の衆生への「喚びかけ」、「喚び声」であります。第十八願の信心とは、この如来の「喚び声」である本願招喚の勅命を素純に聞き、信受する外はありません。聖人は『一念多念証文』に第十八願成就文を釈して、

「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願をききて疑ふころなきを「聞」といふなり。またきくといふは、信心をあらはす御のりなり(『同』〈第二版〉六七八頁)

といわれています。

本願の名号のおいわれを疑いなく聞くところ、大悲の仏心はわが心に満入するのであります。

信心とはまことに如来よりたまわりたる信であります。煩惱をもったままで、如来に摂取され、お浄土への道を歩ませて頂いていることが、信知せしめられていく世界といえましょう。この信心が往生成仏の正因であります。このことを『信文類』で、

この心はすなはち如来の大悲心なるがゆゑに、かならず報土の正定の因となる。

(『同』〈第二版〉二三五頁)

とご教示されているのであります。



私達は如来の大悲をあおぎ、信心決定と同時に如来の摂取不捨のおすくいの中に生かされているのであります。このことを聖人は、入正定聚の益とご教示されています。

正定聚とは、正定は正しく往生成仏に決定することであり、聚は聚類(なかま)ということであり、正定聚とは正しく往生成仏に決定したなかまに入ることです。信心の行者にはこのような摂取不捨の利益がめぐまれるのであります。『親鸞聖人御消息』に、

真実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。

(『同』〈第二版〉七三五頁)

といわれているのであります。

信心の行者は凡夫^{ぼんぷ}のままで、正定聚の撰取不捨の大悲の中で生かされているのであります。この信心のよろこびは、おのずと称名念仏の感謝の日暮らしとなって展開致します。

如来の大智大悲の結晶である名号は、仏より衆生への喚び声となり、衆生に信受され、それはおのずと衆生の口より感謝の称名となって流れ出ているのであります。仏心がわが心にめぐまれ、本願力に生かされてある信心の喜びは、救いたもうみ仏への感謝の称名となって相続されていくのです。

ここに混迷の世を、如来の大悲を頂き、信心念仏申して、着実に歩む真宗者の生き様があるといえましょう。

(勸学寮頭)